●エッセイ

ほんとうの孤独

有吉玉青

人は、一人では生きてゆけない。人は社会の中で、人との係わりあいの中で生きてゆくのだという。そうだろう、そうに違いない。けれど、人は、社会と、また人と、ほんとうに係わってゆけるのだろうか。

エドガー、アラン、メリーベル。『ポーの一族』を読むと、そんなことを考えさせられる。美しい主人公たちは、年をとらない。永遠に十四歳の少年少女のままだ。

彼らは年をとらないから、ひとつの街に長くは留まっていられない。またバンパネラであることに気づかれないために、鏡に映るように、脈拍があるように気をはって、苦手な十字架も平気なふりをしなくてはならない。人間社会の中に、彼らのやすらぐところはない。友達をつくれない。人を愛することもままならない。

そうして彼らは時を超え、永遠に旅をする。ときに、かつて遊んだ友達の老いた姿や、愛した者の子孫たちと、街ですれ違いながら——。

誰とも、何とも係われない。それは、なんと寂しいことであろうか。主人公たちはそんな場面で、無邪気な笑顔を見せることがあるが、それはほんとうの孤独を知る者だけが見

せる、不気味な笑みでもあるように思われる。
そんなふうに、かの遙かなる一族たちに感情移入できるのは、自分の中に、彼らの寂しさに通じるものがあるからだろう。先の問い——人は、社会や人と、ほんとうに係わってゆけるのだろうか、というのは、私にとって、切実なものである。
社会については、これはずっと前から。
あれは、『ポーの一族』が、別冊少女コミックに不定期に連載されていた一九七五年のことだった。その年の巷の話題は、なんといっても三億円強盗事件が十二月十日をもって時効になるということで、いつか秒読みも始まった。私のいた小学校六年生の教室でも、教師が、「犯人がつかまると思う人！」と、生徒に挙手を求めた。
口々に何かを叫びながら手を挙げる子供たちの中に、私はいなかった。かといって、手を挙げない理由もないのだった。私はどうも、その事件に興味が持てず、それゆえに、態度を決めるほどには、その事件を把握することができずにいたのである。盛り上がる教室の中で、両腕を下げ、叫ぶ言葉もなく肩をすぼめているのは、なんとも孤独な経験だった。
後に、私は、この事件自体は、その七年前に起きたことだということを知った。あのブームはふってわいたお祭り騒ぎにすぎなかったのだ。自分がブームに同化できなかったことも、あながちおかしなことでもなかったのかもしれない。
けれど、あのときの気持ちと似通ったものを、私は今でも感じることがある。新聞を賑

わす事件の数々を、私はどうも、身近に感じることができないのだ。ニュースが、ニュースの域を、知識の域を出ない。首相がかわる。でも、それで何がどれだけ変わるのか、正直に言って、私にはよくわからない。

私はときどき、この世界が、自分と係わりのないところでまわっているような気さえするのである。あるいは、まるで自分が知らないうちに三億円が強奪されていたように、自分が生まれるとうの昔に世界は始まっていて、そして、そこに入りそびれてしまったという気も。これは私が、安保、日中、ベトナムといった問題が最も熱を帯びていた時代を過ぎてから青春時代を迎えたせいもあるだろうか。突出した事件は、人が社会に入るいい契機になる。高度経済成長を遂げた豊かな社会は、私の中に、さしたる問題意識を育まなかった。私にとって、世界はいまだに途中から読み始めた連載小説のようだ。私は、社会と確かに係わっている実感を持てずに、宙に浮く。

それならば、人とは、どうか。

そちらに関しては、私はかなりオプティミスティックでいたのだが、そう簡単なものではないらしいということに、この頃、気づき始めている。学生時代などは、肩を並べた友人たちとは、わかりあっている、同じことを考えているような気がしていたものだが、あれも、ほんとうのところはどうだったのだろう。

人というのは、自分の想像を越えたところにいる。自分のことを思えばわかるのだが、

誰と一緒に何をしたところで、それは出来事として自分だけのものであり、悩みになると、それはもっと自分だけのものである。誰もそれを解決できない。日々複雑になってゆく自分という宇宙。人はそれを知らない。知りようがない。想像する以外になく、そしてそれは想像以上のものではない。

人は、ほんとうにたった一人で、社会の中に、人の中に彷徨(さまよ)っている。だから、係わりを持ちたい。確かに係わりたいと思う。

われわれは、バンパネラと違い、鏡に映った自分の姿を見ることができるし、そこに自分の老いを認めることもできる。血液は脈を打つ。人を愛していいだけ幸せかもしれない。係わりを持てると思えるだけ幸せかもしれない。でも、ほんとうに持てるのだろうか。

長い時を生きるポーの一族。そのかなしみは、われわれのかなしみと、どれだけ違うだろう。

有吉玉青　一九六三年一一月一六日、東京生まれ。作家。八九年に発表した『身がわり―母・有吉佐和子との日日』で坪田譲治文学賞受賞。その他の著書に『ニューヨーク空間』『私はまだまだお尻が青い』『黄色いリボン』など。

小学館文庫

ポーの一族 3

1998年8月10日初版第1刷発行（検印廃止）
2002年4月1日　　第6刷発行

著　者 ―――――― 萩尾望都

発行者 ―――――― 辻本吉昭

印刷所 ―――――― 図書印刷株式会社

発行所 ―――――― 株式会社　小学館

101-8001　東京都千代田区一ツ橋 2-3-1
振替（00180-1-200）
TEL　販売 03-3230-5749
　　　編集 03-3230-5456

ISBN 4-09-191253-2